ワイヤレス革命 米国の波 ■下

草の根プロバイダー躍進

「あなたもインターネットプロバイダー（接続業者）になりませんか」。ニューヨークの新興企業ジョルテージ・ネットワークスは三月下旬、フランチャイズ方式による無線ネット接続サービスを始めた。

プロバイダーになるのは、大企業ではなく個人や商店。専用の無線機器やアンテナを購入、電話回線などで送られてきたデータを近隣のネット利用者に最大毎秒十一メガ（メガは百万）ビットの高速無線で送る。個人や商店はいわば中継基地。デジタル加入者線（DSL）やケーブルテレビなど高速回線を引き込んでいれば、誰でも「ミニプロバイダー」になれる。

必要な機器は総額二千ドル程度。毎月十ドル払ってくれる利用者が二十人いれば一年以内に元が取れる。ジョルテージは利用者開拓や料金徴収を担当、ミニプロバイダーと収入を折半する。家庭や商店の小遣い稼ぎとして売り込み、全米にサービス地域を広げる考えだ。

草の根プロバイダーの勃興（ぼっこう）――。通信不況のつめ跡が残る米国で、無名のネット接続会社が続々と誕生している。各社に共通するのは「Wi-Fi（ワイファイ）」と呼ばれる無線技術を利用している点。通信距離は短いが、高速で料金も安いこの技術を使えば巨大通信会社に簡単に挑める。

サンフランシスコのスプートニックもその一つ。無線カードを装着したパソコン利用者を会員として募集。無料での無線ネット接続サービスを提供するのと引き換えに、ミニプロバイダーになってもらう仕組みを考案した。

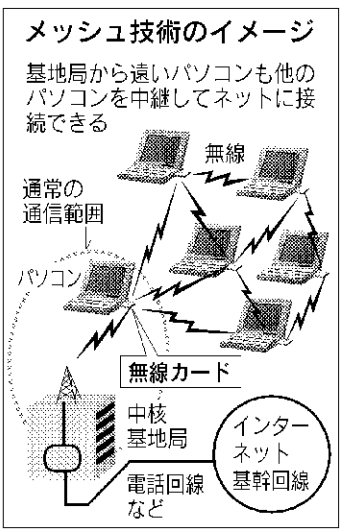
同社の専用ソフトを使うと会員のパソコンが基地局の機能を備え、他のパソコンと無線でデータをやり取りできるようになる。会員のパソコンを中継基地にし、近隣の企業顧客に有料で無線ネット接続サービスを提供する作戦だ。会員は日本にも広がっている。

米国は家庭や企業に引き込まれる「ラストワンマイル回線」を地域通信会社などが独占。ブロードバンド（高速大容量）通信普及の足かせとなっている。安価な無線技術でブロードバンド通信網を構築、独占の壁を軽々と飛び越える草の根プロバイダーは旧来の通信秩序を崩す力を秘める。

フロリダ州のメッシュネットワークスは、パソコン利用者同士が網の目のようにつながっていく「メッシュ技術」を実用化した。無線カードを装着したパソコン利用者が適当な間隔で散らばり、どれか一つを高速ネットにつなげば、他の利用者もネットにつながる仕組みだ。

全米で産声を上げる無線ベンチャーに、ベンチャーキャピタル（VC）も熱い視線を注ぐ。米調査会社ベンチャーワンによると、昨年の米VCの情報技術会社に対する投資のうち通信・ネットワーク関連が四割（八十四億ドル）を占めた。

メッシュネットも資金調達を検討中。「多くのVCが当社の事業に強い関心を示している」（技術マーケティング責任者リック・ロトンド氏）。巨大通信会社が巨額赤字に陥るのを尻目に、ベンチャーを主役にした米国版ワイヤレス革命が始動。そこに巨額マネーが流れ込み、さらなる革新を生もうとしている。



この連載はシリコンバレー＝小柳建彦、ニューヨーク＝篠原洋一、中山淳史、片野温、倉沢美左が担当した。